

落葉の坂道

ベスト・エッセイ2002

落葉の坂道

日本文藝家協会編

● 編集委員 高田宏 / 津島佑子 / 増田みす子 / 三浦哲郎 / 三木卓

落葉の坂道

二〇〇二年六月三十日 第一刷発行

編者——日本文藝家協会

発行者——常田 寛

発行所——光村図書出版株式会社

東京都品川区上大崎二―一九―九

郵便番号一四一―八六七五

電話〇三三四九三二二二一（代）

印刷所——株式会社加藤文明社

製本所——株式会社難波製本

©Nippon Bungeika Kyokai 2002 Printed in Japan

ISBN4-89528-196-5 C0095

価格はカバー・帯に表示してあります。

本書の無断複写（コピー）は禁じられています。

落丁本・乱丁本はお取り替えいたしません。

ベスト・エッセイ2002

落葉の坂道

目次

べしは正しく使ふべし

阿川弘之 10

今様四条河原

富岡多恵子 14

イエス、イツツ・ミー

山本一力 19

はだかの王様

池内紀 24

眼

津村節子 28

とんぼ

辻章 34

ふれあつた人々の話

大庭みな子 36

シワの美学

新藤兼人 39

オキユパイド銀座

種村季弘 42

雪の中の人型

稲葉真弓 47

吉行さんと「物自体」

長部日出雄 51

犬と暮す二十八年

中野孝次 57

七十歳の引越し

秋山駿 61

ぶっきらぼうということ

川上弘美

66

二〇〇一年一月一日

谷川俊太郎

70

本屋さんは「ひとさらい」

玄侑宗久

74

川の土手の光景

佐伯一麦

78

ふりかえり

篠田桃紅

82

ゆーしったい

目取真俊

87

聖俗渾然の地の囃し唄

高梨豊

90

演劇史に残る交友

渡辺保

94

葬儀の日の台所

小川洋子

97

「日課・一日3枚以上」

眉村卓

103

高い空の下で

城山三郎

108

ここまでは描きたかった

坪内祐三

112

いつ泣けるか

河合隼雄

119

女の老いかた

田辺聖子

122

正業

阪田寛夫

129

お山の方カタ

野見山暁治

134

洗足池のお喋り

三枝和子

138

人間はどこまで動物か

日高敏隆

142

町へ行くこと

堀江敏幸

147

本を選ぶという夢

三宮麻由子

152

名前の印象

小林恭二

156

「土佐源氏」の謎

佐野眞一

161

鬼の雨

高橋順子

167

「檸檬」という価値観の反逆

鈴木貞美

171

『手』の応用

村田喜代子

175

坂網猿

高田宏

178

まだまだ、まだ……

辺見庸

180

波音を聴きに

伊藤桂一

184

トゥチャ族の山歌

津島佑子

188

意味を捜さないで——『フーベルトとりんごの木』

山田太一

192

今日と明日のあいだ

多田智満子

196

鞆の中には自分がいる

鈴木志郎康

199

牛島春子さんの「満洲小説」

川村湊

203

私を変えた戦時下の修学旅行

近藤富枝

208

「純文章」の可能性

清水良典

211

書けなかったこと

中丸美繪

214

天神様と試験

木下順二

218

未来予測

増田みず子

221

すみだの花火

庄野潤三

224

落葉の坂道	三浦哲郎	228
未来を食べて生きる	日野啓三	233
二度死に風太郎	久世光彦	237
彌生子の日記から	岩橋邦枝	240
軽蔑の小さな叫び	柴田 翔	246
西部劇の「学校と教会」	川本三郎	251
百で買った馬	青木 玉	255
ノイズという子守歌	藤井誠二	257
「血液銀行」から四十年	つげ忠男	261
千二百字が生んだ物語	最相葉月	265
時計の登場	小池昌代	269
ひとり車で雪道を	田久保英夫	272
洋館の学校	古井由吉	277

移り目と変り目	黒井千次	282
狐の村で	岸田衿子	287
作家のうしろ姿	大河内昭爾	291
台所の詩人たち	岩阪恵子	298
ヤモメのゴルフ	古山高麗雄	304
正しい椅子の坐り方	別役実	312
ひとの声を求めて	長山靖生	315
本田桂子さんの尊い戦死	瀬戸内寂聴	319
古い切抜き帳	三好徹	324
黄金の釘	杉本苑子	331
宿望のバトル	三木卓	335
老後と老前	水上勉	341

装画||もりや あきお
(ねむの木学園)

装幀||三村 淳

ベスト・エッセイ2002

落葉の坂道

べしは正しく使ふべし

阿川弘之

四十五年来の旧友、日系アメリカ人のサムが、長かつた日本での勤務を終り、引退してカリフォルニアへ帰ることになったので、送別の小宴を催したら、

「引越荷物の整理中、処分してしまふ書類の中からこんな物が出て来た。アガワさんなら興味持つし、気に入るだらうと思つて」

と、古新聞の切抜を一枚、他の記念品と一緒にくれた。一九九七年二月十四日付産経夕刊のコラムで、題が「くたばれ『新日本語』、筆者が「編集委員脇地炯」となつてゐる。一読して「ほほう」と驚いた。脇地編集委員は、「舞台を立ち上げる?」、自動詞と他動詞をこたまぜにしたそんなけつたいな言葉があつてたまるか。「飼犬を散歩させてあげる?」「私つてバカ正直な性格ぢやないですか?」、こんな甘つたるい変な日本語不愉快だと、近頃の若者の言葉使ひ、言語感覚について、カンカンに腹を立ててゐるのであつた。私の言

ひ分を代弁してもらつてゐるかのやうで、なるほど「氣に入る」けれど、実はさつき、家を出る直前、「氣に入らぬ」日本語の用法を二つ見つけて、而もそれがうちの娘と息子の文章で、困るなアと顔しかめた矢先だつたから、あまりの偶然に驚いたのである。

「たまには人間、ドーンと休みをとるべきと思ひ立ち」

右が「別冊文藝春秋」最新号に出てゐる娘佐和子のエッセイの一節、

「福沢諭吉は（中略）フランスから借款を受けて長州を制圧のうえ、幕藩体制を絶対主義化するべきと唱え」

これが「中央公論」新年号所載の、長男尚之の外交評論の一節、どう考へてもをかしい。近頃新聞週刊誌に、「早期解散は避けるべき、との声もあり」といつた表現がのべつ出て来ること、どうかするとちやんとした（？）作家ですら時々それをやることは、充分承知してゐる。「立ち上げる」や「してあげる」、「ぢやないですか」同様、をかしいと思ふし、いやでしやうが無いけれど、今や私は半分もうあきらめ気味で、ひと様の文章に一々苦言を呈したりはしない。しかし、自分の息子と娘がそんな、それこそ「けつたいな」語法に汚染されてゐるとなれば、黙つてゐられない。

サムとさういふ話をして、別れて家へ帰つた翌朝、二人にそれぞれ電話をかけた。

「あのね、べきは『べく、べし、べき、べけれ』と活用する助動詞の連体形だからね。体

言を、つまり名詞代名詞を伴ふのが本来のかたちで、終止形のやうな使ひ方するのは変だよ。古くは萬葉集を見てごらん。『磯のうへに生ふる馬酔木を手折らめど見すべき君がありと言はなくに』——。べきと体言の『君』とがちかに結びついてるだろ。『見すべきと吾は思ひしに』といふ風な言ひ方はあり得ないんだ。俺は国文法も国文法変遷の歴史も、あんまりちやんと勉強してゐないんで、百パーセント自信を持つては言へないけれど、新しく定着しかかつてゐる現代語としてよほど寛容に見ても、やつぱり許しがたい誤用乱用だと思ふね。第一、語感がきたないよ。ゆふべ、お前たちも知つてるサムと一緒に食事をしたんだが、偶々『くたばれ』『新日本語』といふ三年前の新聞コラムの切抜を置土産に持つて来てくれて、読めとすすめるから、読んで、あと、べきの話になつたら、べきのあの用法はをかしい、僕も嫌ひだと、アメリカ人のサムだつてさう言ふんだぜ」

カリフォルニアへ帰る旧友は、日英両語ぺらぺらで、日本の国語問題にも深い関心を持つてゐる。だからこそ、あんな古い産経新聞の切抜を大事に残して置いたのだらう。

「佐和子の場合で言ふと」と、私はつづけた。「『ドーンと休みを取るべきだと思ひ立ち』か『休みを取るべしと思ひ立ち』ならまあいい。それとも、そんな小むづかしい厄介な文語調の助動詞、使ふのもうやめると言ふなら、『休みを取らなくてはと思ひ立つて』と、いつそ平易な、完全な口語体にしてしまへばいいんだ。新聞の政治面を引き合ひに出せば、

記者連中も、べきを正しく使ふか、『早期解散は避けなくてはならぬ、との声もあり』とするか、どつちかにして貫はなくちやあ。尚之の文章、やはり同じ。『幕藩体制を絶対主義化すべしと唱え』か『すべきである』と唱え、『絶対主義化しなくてはならぬと唱え』、三つのうちどれかだらうな」

平素父親を、IT革命も最近の国際情勢も、芸能界のこと、スポーツ界のこと、何ンにも分らぬ時代おくれの爺さんと思つてゐる息子と娘が、今回に限り、神妙に聞いてゐて、『二度と使ふなよ』と言ふ私に、殆ど反抗しなかつた。

さういふわけで、もし、これを読んで納得賛成して下さる読者あらば、「新日本語」のうちせめてべきの誤用乱用だけでも駆逐すべく、私どもの味方になつて、新聞紙面の日本語だけでも、もう少し伝統の美しさを保てるやうに、一臂の力を仮して戴きたきものなり。私よりはるかに若い新聞記者の中にも、産経の脇地炯氏のやうな人（個人的面識は無し。現在満六十歳の由）があるのだから。

あがわ・ひろゆき（作家）「文藝春秋」二月号

今様四条河原

富岡多恵子

ついでこの間まで、オトナに刃向い、年寄りに盾突いていたひとが、いつの間にかやら「老人」と相成っていて、「老い」を語り、或いは老年期の生き方のようなものを書いたりしているのを新聞雑誌の広告等で見かけると、そのひとたちの若い時の行状（といっても、書いたものから、またはマスコミによって）を知っている者には、時に、ホホエましくもちゃんちゃらおかしくなることがある。ということは、他人ひとの振り見てわが振り直せで、「生き方」のようなマジメなことだけはまちがっても口にすまいと自戒させるのである。

西鶴の年譜では、やはり「刪補西鶴年譜考證」（野間光辰）が、もっともくわしいものであるが、それを読んで感動するのは、西鶴の「身元」がわからぬことである。いってみれば彼は突如として「俳諧師」として出現してくるのであって、どんな親の子に生れ、どんな教育を受けたのか、どんな商売だったのか、具体的な事実はナーンニモわからぬの